〈金沢星稜大学　人間科学研究　第５巻　第１号　平成 23 年９月〉

吹奏楽活動における子どもの変容について

About the transformation of children by Wind-orchestra activity

谷　中　　優
Suguru Taninaka

〈要旨〉

筆者の義務教育現場における音楽教育の実践は31年に及んだが，とりわけ吹奏楽部での指導は大きなウェイトを占めていた。教育の場ではあるが，子どもよりもまず自分が楽しみたいと考えたのである。そうして「こんな楽しいことを子どもたちにも体感させたい」と願ったのである。楽しむためには基礎的な演奏の技術とともに，お互いの心の疎通や心を一つにすることが必要となる。個を考え集団を考えることから相互理解が始まるだろう。例えばコミュニケーション能力やトータルな表現の能力を，そういった様々な活動をとおして培うことができるだろう。

ここでは初任校である中学校吹奏楽部の活動に焦点をあて，子どもたちの活動と成長，そして変容といった足跡を，関わった指導者として振り返る。

〈キーワード〉
吹奏楽，音楽教育，創造性

１．吹奏楽部との出会い

１－１．出会い

1976年４月，大学[1]卒業の翌月には新任の教師として赴任した千葉県松戸市立第六中学校。当時生徒数千数百名を数える管内屈指の大規模校であった。学級担任とともに受け持つことになったのが吹奏楽部である。吹奏楽に魅せられた筆者が期待に大いに胸を膨らませて臨んだ部の子どもたちとの出会いは，しかし，いささか期待外れの感は拭えなかったことを覚えている。

部員は総勢28名。28名の部員数は中編成の吹奏楽としては十分成立する数である。しかしいくつかの問題点を抱えていた。一つは編成の問題である。まず低音楽器であるコントラバスが無いというのはわかるが，チューバもない。コンサート用のバスドラムも無かった。

トランペット等金管楽器がやたら多く，バンドの編成としては「コンサート･バンド」と言うよりは「マーチング･バンド」に近いが，それにしてもバランスの悪い編成である。先輩顧問によると，基本的にマーチング・バンドの形を取っているが，楽器の偏りがあって如何ともしがたく，結局現在のようになってしまったとのことである。

１－２．誓い

初対面で子どもたちが心をこめて演奏した数曲も，期待と歓迎をこめた心は伝わったが，だだ驚きをもって聞くしかなく，初対面の喜びよりも「これからどのように指導すればよいのか。」との気持ちが強かった。しかし同時に,「この子たちにぜひ音楽の楽しさや厳しさを体感させたい。」と，その時心に誓ったものであった。

２．教育活動

２－１．練習体制へのプロセス

「新任の先生が来たことだし，メインでやってもらって私は補佐に。」と先輩顧問の言である。そのようなことで顧問に相談しつつ，まず編成を中編成のコンサート・バンドに持っていくことに着手した。といっても本年度予算は大筋で決定しているため，壊れている楽器を修理して使用するか，精々低価格の楽器１本程度を新たに購入可といった状況であった。

同顧問はフルートを演奏し，簡単な楽器の修理（とはいえ，かなり難しいものまで）はほとんどこなしたマルチな指導者であった。小型バーナーで金管楽器や木管楽器の修理をするなど，メンテナンス関係は同顧問に負うところが大きく，編成を変えていった過程でその修理技術は強い味方であった。

それでまず，多いパートから補充パートへの移動の希望を取り，急激にではなく，子どもたちの希望を尊重しなが

ら少数のパート移動を実現させた。またネックが折れ，ほこりまみれのコントラバスを古い倉庫から見つけ出し，きれいに掃除して，ボンドで折れたネックを接続して補強した。弦の張力が強いので１本弦だけしか張れなかったが，それでも何とかコントラバスのパートが一つ付加された。当時の楽器の状態は，まずそのような貧弱なものであった。

子どもの実態というと，優秀な子どもが多く，男女比も約四分六で女子が多いといっても，吹奏楽としては男子が多い方であった。ただし優秀さが逆に災いして自己主張の強い子どもが多く，演奏にもそれが現れるといったことが日常的であった。つまり編成の面と自己主張の両面によって，演奏のバランスがかなり損なわれていた事実があった。

楽器購入など備品関係については教師サイドで徐々に解決できるだろう。しかし子どもの内面については，意識改革が必要であり，これは教師サイドだけでは解決できない。子どもが意識・認識し，そうして理解し体感しなければどうしようもないからである。

２－２．変革

ａ．その1

前述のような実態を把握した上で，次の段階は子どもたちの意識を変えることに着手することになる。

第１に編成上の問題である。自分がやりたい楽器を無制限に認めてしまうと，結局普通の編成（ノーマル編成）からは遠のいて行き，益々バランスが崩れていくばかり。それ故，「現在こういった編成を考えているので，このパートとこのパートが多すぎる。逆にこれとこのパートは少なすぎるね。」「このギャップをできるだけ埋めていくことで，バランスの悪さは一つ解消されることになる。」といったことを子どもたちに説いていった。

ただし「楽器（パート）の移動は決して強制ではない」こと。「あくまでも自分たちの自主的な判断で考えてほしい」旨を話して，子どもたちの判断に委ねることにした。その結果数人の子どもが申し出，別のパートに移動して編成上のバランスが一部是正され，一歩踏み出すこととなったことは既述したことである。

ｂ．その2

次に演奏時における子どもたちの意識の問題が挙げられる。目立とう精神旺盛な子どもたちは，どうしても主旋律の部分や対旋律の部分などで，必要以上の音量を出してしまう。伴奏の部分でさえも。当然バランスはガタガタである。

そこで，「一つ一つのパート（自分のパート）を大切にしながら全体を聴いて，全体も大切にすること」を子どもたちに浸透させていった。そういった「心に訴えかける」ことと同時に，実際の演奏での指導を兎に角徹底させた。そういった積み重ねが功を奏したのか，徐々にではあるがバランスは良くなっていった。

付随して，練習時における基礎練習の時間が極端に少なかったことを受け，基礎練習の徹底を図った。これも子どもたちの意識改革の一端である。やはり子どもたちは曲を吹きたがる。これは子どもたちにとってまったくの自然な行為であり心の動きである。しかしここでも，基礎練習の大切さ必要性を説き，曲をすぐに演奏したい気持ちを少し抑えて，基礎練習に費やす時間を確保するように努め，なんとか軌道にのせることができた。このことで，ピッチを合わせようとする意識も芽生え始めた。

ｃ．その3

次に練習方法である。前述の基礎練習の時間確保と同じく，例えば先輩が後輩を見るといった場面は，皆無ではなかったが極端に少なく，ほとんど教師が対処した。初年当初は新入部員を一人一人見ていった。１年生が終わったところで２年生，２年生が終わったところで３年生というように個人指導をし，その後で全体の基礎練習から始める。これを１年間続けると，部員数28人といえどもかなりの負担で効率も悪い。

そこで２年生が１年生を見，３年生が２年生を見るというシステムを２年がかりで作り上げた。そうして赴任３年にして，辛うじて指導体制・活動体制が軌道に乗ったのである。その間，子どもたちの意識も「楽しいだけの部活」から，「楽しく，そして統制のとれた良い演奏」というように，少しずつではあるが変化していった。

ｄ．その4

最後に発表についてである。毎週月曜日の全校朝礼での校歌斉唱時の伴奏と退場の演奏の他，入学式，卒業式，運動会など学校行事への参加は活発であったが，独自のコンサートは皆無で，それゆえまとまった演奏は運動会のみ。それも行進曲や流行りの曲がほとんど，という有様。

そこでまず子どもたちの独自の発表の場を設定することを考え，体育館での「定期演奏会」を企画し初年の年に開催した。定期演奏会の名称はないが，過去に体育館で独自の演奏会を１，２度したことがあることを聞き，「第３回定期演奏会」としたが，「定期演奏会」は実質上初めてのことであった。この演奏会の開催により，個々の子どもたちは勿論のこと，部としてのモチベーションも上がったものである。

この活動はやがて，第６回定期演奏会を市民会館で実施することにつながっていくことになるし，その第６回以後，六中吹奏楽部の市民会館での定期演奏会は定例化する。中学校の音楽系部活が市民会館で演奏会を開くことが，市内，

近隣でも初めてのことであったことを筆者が知るのは，第６回定期演奏会のずっと後のことである。

学外での定期演奏会は，純粋に「子どもたちに少しでも音響の良いところで演奏させたい。」との気持ちからであったが，他にも反響があったようで，「六中のように市民会館で演奏会を開きたい。」と市内の中学校の吹奏楽部の子どもたちが何度か訪れ，それに対応したことを覚えている。

それ以前，第４回，第５回と本校体育館を会場に回を重ね，赴任３年目にようやく前述した第６回定期演奏会を迎えることになる。回を重ねる毎に，微々たるものではあるが，子どもたちの演奏は確実に伸びていった。誰かの言葉ではないが「子どものためなら何だってやる。」の実践である。ただし筆者の場合は子どものためだけではなく「私自身が好きなことをやりたい」という，筆者自身のための活動でもあったことは先に述べた。

ｅ．後援会の設立

ところで，子どもたちが使用している楽器はかなり貧しいものであったことは既述した。不足楽器の充当や新しい楽器の購入など費用は必要だが皆無の状態である。先輩顧問や学校長にも相談して購入希望は提出したが，そう簡単に右から左に費用が動くわけではない。様々な方向から楽器購入費についてプッシュしていたが，表立った動きはなかった。それでまず，保護者を対象にした部活動の参観を企画・実施することにした。

当時，文化系部活動の保護者会はどこも実施しておらず，前例がないことで実施には難しい面もあったが，学校長からはあっさりと許可が下りた。準備期間を経て初めての吹奏楽部保護者会が開かれたのは，それからまもなくのことである。

子どもたちの練習を参観した後で，引き続き懇談会を開いた。懇談会ではまず顧問の筆者たちが子どもの実態，部の実態を説明した。質疑応答のあと保護者からは「子どもの様子や吹奏楽部の内情や様子がわかってよかった。」の声とともに，「こんなに困っていることを始めて知った。」「これでは子どもたちがかわいそうだ。」といった声も聞かれた。

そういった中で予期しない提案が持ち上がった。懇談会に参加していた父親の一人が，「後援会を作って子どもたちの活動を支援していく，というのはどうでしょう。」この発言に，「賛成」「賛成」の多くの声とともに，大きな拍手が沸き上がった。

その場で会の大まかな組織づくりがなされた。記憶が定かではないが，会長，副会長などが選出され，他の必要な役員や会則の原案等は早急に作成して後日提案することになり，第１回の後援会総会が開かれたのはまもなくのことである。総会では正式に前回の提案事項や原案が承認された。それは吹奏楽部後援会が立ち上がった瞬間であった。1978年夏のことである。それ以後，後援会の深い理解と協力を永年に渡り受けることになるのである。

この後援会の様々な協力・支援が一つの要因になって，六中吹奏楽部はその後大きく飛躍していくことになる。しかしこの時点で回りも，そして筆者自身でさえも，そのようなこと―飛躍―を，想像さえしなかった。

この時すでに，３年生16名，２年生23名，１年生22名，合計61名の大所帯に膨れ上がっていた。当然のことながら，この３年生16名は筆者が初任の年に１年生だった子どもたちである。

２－３．定期演奏会

ａ．第６回定期演奏会

（図１）

第６回松戸市立第６中学校吹奏楽部定期演奏会
78.10.21 於 松戸市民会館

既述のように，第６回定期演奏会を市民会館で開催することになるが，開催まで当初からスムースに事が運んだわけではない。会館の借用の件や，会館への引率の件，また楽器運搬の問題など山積みであったが，一番大きな問題は「あんな大きな会場で恥ずかしくない演奏ができるのか。」との大勢の懸念であった。しかし最終的には周りの人々の理解，協力を得て実現することになる。役員を中心に，後援会が果たした役割は大きいものであった。

レタリングの得意な同僚にステージ看板を，プログラムは孔版の名手に依頼し，というように本校同僚の協力で開催に漕ぎつけた。プログラムは二部構成とし，一部と二部の演奏の合間にアトラクションを挟んだ。アトラクションは剣道部のＳ顧問に依頼し，部員による「型」を披露した。演奏とは直接関係はないが，剣道部からのエールの意味を持っていた。

他の部活の協力を得たことで，剣道部の県大会出場の際の壮行会を，生徒会の壮行会とは別に吹奏楽部が企画して開くなど，両部の交流はその後も長く続いた。またその交流は部活動を超えて，異学年のクラス（剣道部顧問のクラ

スと筆者のクラス）の交流にも発展していった。

このような経過と内容を持った市民会館での初めての定期演奏会は，幾つかの課題を残しながらも成功裏に終えることができた。この体験で子どもたちは何を得たのだろうか。

前述した部活間の交流をはじめ，一つのことにみんなが協力して成し遂げていくプロセスを体験したことで，周りの人々の温かさを知ったこと，仲間の理解や協力が大切であること，演奏会の企画・実施のノウハウ，といった諸々のことに気づき，そうして理解への道を歩み始めた子どもたちであった。

もちろんのこと，音楽の楽しさや素晴らしさ，そして厳しさを少しでも感じることができたならば，この演奏会は大きな意味を持つだろう。筆者はその後の子どもたちの活動から，そのことを確信したのである。

市民会館におけるこの初の定期演奏会は1978年の10月のことである。それはまさに吹奏楽部後援会が発足した２ヵ月後のこと。後援会は金銭的支援だけではなく，特に役員を中心とした献身的な理解と実践的な協力が大きく，すでにこの時点で，子どもたちの活発な活動を進めていくためには，なくてはならない存在になっていた。

ｂ．第７回定期演奏会

翌1979年には第７回定期演奏会を開催する。既述したが，着任２年目から少しずつ増えていた部員数も当初の一まわり二まわりも大きくなり，筆者が目指したシンフォニック・ウィンド・オーケストラ（交響吹奏楽団）の形態も少しずつ充実していった。市内では本校吹奏楽部に刺激されて，幾つかの中学校吹奏楽部が市民会館でのコンサートを実現していた。その最たるものはＩ中吹奏楽部で，その部長は昨年の六中の演奏会直後，一番最初に筆者のところに相談にきた子どもであった。

相変わらずコンクールに主眼を置いていた多くのスクール・バンドの意識が，子どもを大切にし，地域を大切にしながら，自分たちも楽しさと厳しさを体感していく，地域に根差したスクール・バンドの一つのスタイルを示すことができたことで，「このような方向，このような方法もあったのだ。」ということに，少しでも向いていくことを筆者はうれしく思った。

しかしこのことは当初から筆者の頭にはなかったことで，これらの現象は思わぬ副産物ではあった。直接接点のなかった子どもたちとのふれあいによって，そのふれあった子どもたちが自分の学校にもどり，今まで経験しなかった市民会館での演奏会を実現させたことは，結局その子どもたちが当校の顧問や吹奏楽仲間に「影響を与え，動かした」ということではないか。筆者はそのような前向きな子どもたちに感動したのである。

（図２）

松戸市立第六中学校吹奏楽部第７回定期演奏会
79.10.6 於 松戸市民会館

（市内初の中学校管弦楽団＋合唱）

さて，この年には既に本校に弦楽アンサンブル同好会が結成され，練習に励んでいた。そこでＴ顧問に相談し，弦楽アンサンブルと吹奏楽の共同で，臨時のオーケストラを結成して演奏を披露した。松戸市内では初めての中学校管弦楽団の誕生であり演奏であった。しかし現在，このことを知る教育関係者は皆無に等しい。

プログラムを見ると六中吹奏楽団の委嘱作品も数えることができる。また友情出演も多い。市内の中学校に転任していた初任時の顧問，元六中の音楽主任と当校の合唱部顧問の２人は，合唱部の子どもたちを引率しての参加。

千葉市Ｃ中学校からは吹奏楽部顧問，隣町のＨ中学校からは金管アンサンブルの子どもたち，六中からは合唱部，放送部，演劇部の子どもたちに，前述した弦楽の子どもたち。まさに多彩な顔ぶれ，多彩な内容であった。

演奏は，丸山亮／「断章」（1979年度六中委嘱作品[2]），バッハ／「小フーガト短調」，「吹奏楽のためのオスティナート」（1978年度六中委嘱作品），モリセイ／組曲「百年祭」，第三部では「アフリカン・シンフォニー」などシンフォニックな曲とともに，当時の流行がうかがえる曲目が並んでいた。部員数はこの時72名を数えた。

２－４．月刊誌「バンドジャーナル」の取材[3]

実は前年の第６回定期演奏会の折，月刊誌「バンドジャーナル」（音楽之友社）の当時のＦ編集長が松戸市民会館まで足を運んでいた。コンサート終了後，編集長はかなり的確なサジェスチョンを筆者に残したが，その折「近いうちに一度六中吹奏楽部の取材を。」との話があった。そうしてそれが実現するのは，翌年の夏休みのことである。

いつもの練習風景に加え子どもたちや筆者なども取材を受け，かなり緊張した時間を過ごした子どもたちであった

が，当日はいつもの卒業生たちも参加し，その分，在校生の緊張をほぐす役割を担った。そうして取材から約２ヶ月後，本誌10月号に大きく掲載された。

吹奏楽と言えば「バンドジャーナル」，「バンドジャーナル」といえば「吹奏楽の専門誌」と，吹奏楽人間ならば知らない者はいない，国内随一の大手月刊誌「バンドジャーナル」の取材を受け掲載されたことで，子どもたちや周りは非常に喜んだものだ。

しかし有頂天になるよりも，「これはもっと頑張らなきゃ。」といった意識を強く持った子どもが多かったことは喜ばしいことであった。そしてこの月刊誌に掲載されたこと自体，吹奏楽部の子どもたちが様々な力をつけていく一つの原動力になっていくのである。前述した子どもたちの言葉「もっと頑張らなきゃ。」・・・この一言がすべてを物語っているだろう。

３．1980年―この年

３－１．プロローグ

この年は個人的にも忙しい年であった。筆者の作曲活動の関係から，７月にはオーストリア，９月にはオランダの音楽祭への参加が決まっていたからである。オーストリア・シュタイヤーマルク州での音楽祭に参加し，その後北上してウィーン青少年音楽祭にも足を伸ばした。ヨーロッパの吹奏楽，世界の吹奏楽を直接肌に感じ，「これをうちの子どもたちにも体感させたい。」と，しみじみ思ったものである。

帰国して後援会の総会の席で青少年音楽祭の報告をした折，「うちの子どもたちも練習を積み重ねれば，参加できなくはないですね。あながち夢物語ではないと思います。」保護者からは「実現すると良いですねー。」との声があちこちで上がったが，それはその場限りのこととして終わってしまった。

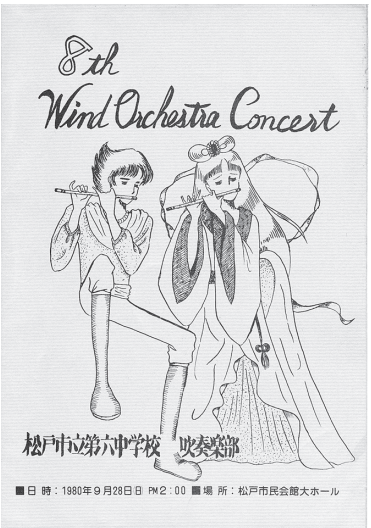
ただし筆者はわずかな可能性にかけて，この件について少しずつ準備を始めようと考えたのだった。同じ吹奏楽のＯ顧問には，この件について「チャレンジしてみようと思う。」と本心を打ち明けていた。筆者は本気でアタックしようと考えていたのである。結果は別にして。

３－２．第８回定期演奏会

９月28日には第８回定期演奏会を開いている。部員は88名になっていた。相変わらず，毎週の全校朝会での入退場の演奏や運動会などの学校行事だけではなく，学内においては新入部員を迎えるミニ・コンサート，部の卒業生を送る会での演奏，対外的には県吹奏楽コンクール，TBSこども音楽コンクール，市内音楽祭など，数多くの本番を精力的にこなしていた。

このようにコンクールにも参加しているが，子どもたちが「コンクールにも出たい。」との希望から，「それじゃ，がんばろう。」と続けていたもので，定期演奏会など自分たちがメインとする活動を大切にしながら，コンクールにも挑戦したいという子どもたちの意欲の表れであり，自主的で能動的な取り組みであった。

（図３）



上（図３）は第８回定期演奏会のプログラムである。第６回のガリ版刷りのものではなく，７回からは後援会の援助によって印刷所で作成したりっぱなもの。表紙デザインなど原稿はこの頃すでに子どもたちで進めていた。プログラミングは子どもたちの希望を取り入れながらも，本校吹奏楽部の独自路線を打ち出したものであった。

プログラムは３部制で，第２部の前半に六中弦楽アンサンブル同好会の友情出演が見える。吹奏楽の曲目を拾ってみると，服部公一「吹奏楽のための序曲 南の島から」，永瀬博彦「吹奏楽のためのオスティナート」（本校委嘱作品），グリーグ「組曲 ペールギュント第１」，エルガー「威風堂々」など独自の内容を持っていた。

もちろんＪポップやアニメ・ソングも包含しているが，大筋で内容の濃い楽曲が多いのは，子どもたちの希望を入れながらも，筆者が考える「子どもたちに体験させたい音楽」を体感させる方向性を見失わなかった結果であったのかも知れない。そこにはいつも，筆者の考えに賛同し行動を共にした，顧問や子どもたち，後援会や職場の仲間がいた。

ところで前記したウィーン青少年音楽祭の参加については事前に審査があり，そのテープ審査に合格すれば参加可能ということであった。エントリーするにあたり，学校長には前もって打診していたが，「やるだけやってみなさい。」と許可が下りたことで，練習していた曲を改めて録音し，送付しておいた。

３－３．吉報

秋になって，待っていたウィーンからの連絡がようやく入った。「テープ審査にパスした！」との吉報である。さっそくＯ顧問と二人で学校長に報告に行ったが，「あっ，そうパスしたの。」「で，詳しいことは?」しかしながら現時点では詳しいことはよくわからない。「じゃ，何か新しい情報が入ったら連絡してください。」とのこと。どうも学校長もピンと来ないようである。

「コンクールのテープ審査に送るね。パスすると良いね。」と子どもたちには話していたが，学校長の様子を見ると，これは現時点で子どもたちに「テープ審査パス」を告げない方が良いのではないかと相談し，とりあえず伏せておくこととした。しかしこの件が広まるのは時間の問題であった。

それから１ヶ月ほど過ぎたある日のこと，突然の電話である。「来週〇曜日〇時に，ウィーン青少年音楽祭の総音楽監督エルヴィン･ヴァイス教授が，第六中学校吹奏楽団宛の音楽祭の招待状を持って貴校を訪問します。」考えてみれば来校は数日後ではないか。あわてて校長室に駆け込んだ。

校長室では「なに，それは大変なことだ！」「兎に角，子どもたちが動揺しないように。先生はいつもどおりの指導を。」「先生，この件は子どもたちに伝えていいんですね。」と筆者。「伝えてください。くれぐれも冷静に！」その後の子どもたちの歓声，興奮は推して知るべしである。ただ子どもたちも，今回パスしたことが具体的にどんなことなのか，この時点でよくわかってはいなかったのだと思う。

３－４．ウィーンからの使者

当日，午前中に通訳と二人でエルヴィン・ヴァイス教授自らがウィーンから来日，来校。校長室でヴァイス教授から学校長に招待状が手渡され，「ぜひ貴校吹奏楽団を我が音楽祭に招待したい。」旨を伝えた。音楽祭の説明など30分ほど経過したところで松戸市当局から送迎の車が到着。ここから後のことは筆者も知らされておらず，現時点で学校長のみが知ることであった。

市庁舎で案内された部屋には，市長，市議会議長，教育長をはじめ市の幹部数人が列席していた。学校からは学校長と筆者の２名。記者クラブも詰めていて，ヴァイス教授が改めて市長に第六中吹奏楽団宛の音楽祭の招待状を手渡すとフラッシュが飛び交った。

ヴァイス教授が「第六中学校吹奏楽団をぜひ我々の音楽祭に招待致したいので，貴市のご理解ご助力をお願いしたい。」と口火を切った。市に対しての正式な参加協力要請である。「議長さん，市議会の方は」と市長が隣の市議会議長に顔を向ける。「市議会は私が何とか・・」といった内容であったか。続けて「教育長さん，委員会の方はいかがですか。」「委員会は私が。」と教育長。

そうして市長の返答があった。「市としても大変名誉なことでありますので，ご招待を謹んでお受け致します。」記者団を前にした，これは公式な発表であった。またまたフラッシュの嵐。まさにこの瞬間，本校吹奏楽部のウィーン青少年音楽祭への参加が決定したのである。

この時点で，子どもたちは誰も単純に「ウィーンの音楽祭に参加できる。」と思っていた。ところで青少年音楽祭は来年７月である。ということは現在の３年生は来年高校１年生である。はたして高校生も参加できるのだろうか。進学先の高校は１校ではない。みんなほとんどバラバラになってしまうである。

後になって顧問の懸念は的中することになるが，しかし今は，今現在は，みんな熱くなっていた。そのような単純なことにさえ気づかないくらい，子どもたちはみんな熱くなっていたのである。

ウィーン青少年音楽祭参加（正確には市が六中吹奏楽団を派遣するのであるが）決定のあと，学校ではＰＴＡの臨時役員会や吹奏楽部後援会，臨時職員会議，渡欧実行委員会の立ち上げなどの頻繁な会合や準備に追われていた。市当局，教育委員会なども同様であったと推測する。そうして慌ただしさと興奮と，しかしその半面冷静な毎日の練習の積み重ねのうちに，1980年は暮れていった。

４．ヨーロッパ演奏旅行の年

４－１．様々な準備

「バンドジャーナル」の取材を受けた年には，すでに１年生バンド，レギュラー・バンド（２，３年）の２つのバンドに分かれていた。常時は別々の練習をしているが，定期演奏会などではプログラムに全体演奏の曲目を組み込んだりしていた。

1981年以降は，１年生バンド，２年生バンド，レギュラー・バンド（３年生＋不足を２年生から）の３つに分かれた練習を取り入れることになる。指導体制は顧問３人がそれぞれのバンドを分担して指導する。教師も個人や個々のパートを指導するが，加えて先輩が後輩を見るというシステムも定着していた。

ところで1981年の春には，ウィーン青少年音楽祭参加の報を入手したオランダ･ケルクラーデ世界音楽コンテスト（フェスティバル）からも，テープ審査を経て招待状が届き，ここに「ウィーン青少年音楽祭」及び「ケルクラーデ世界音楽コンテスト」の両音楽祭への参加が決定することになった。

さて参加メンバー選出について，まず以前から懸念していた昨年度３年生であった現・高校１年生については，多くの問題について解決のメドが立たず，結局参加不可能の決断がなされた。最終的に現･２，３年生合計59名全員をメンバーとして参加させる方針が打ち出された。

本校PTAでは渡欧実行委員会を発足させ，活発な寄付活動を開始していた。市議会においては本件について議会満場一致とは行かず，難航した部分もあったと聞く。多くの人々の理解・協力・助力があり，最終的に松戸市をはじめ千葉県からの予算，寄付金，演奏旅行参加者生徒も教員も一部自己負担という渡欧資金で，15日間のオーストリア，オランダの音楽祭参加が実現することとなった。

渡欧までの間，例年の学校行事や対外行事に参加しつつ，国際フェスティバルのための猛練習が続いていく。手元の資料によると，かなり忙しい時期だったにも関わらず，4月11日に松戸市民会館で「第２回 市川第八中学校・松戸第六中学校吹奏楽部合同演奏会」を開いている。

前年には市川で第１回の合同演奏会を開いたと覚えている。両校の交流はしばらく続いた。数年後，それが発展して両校の卒業生が核になり，新たな吹奏楽団を組織してヨーロッパの演奏旅行を実現することになるのであるが。

４－２．ヨーロッパ演奏旅行

大小様々な出来事や問題を越えて，７月１日，フライトの日を迎える。その直前には「松戸六中ウィンド・オーケストラ渡欧派遣団結団式記念演奏会」を市民会館で終えていた。学校においても，生徒会主催による盛大な壮行会とお披露目演奏会を体育館で開いた。その数日後，本校教職員や保護者，松戸市民等の多くの声援を受けて我々一行は出発した。

それまでにはテレビ局や新聞社などの取材を受け，市庁舎でのコンサートなど多くの関連行事をこなし，毎日の厳しい練習に明け暮れていたが，ヨーロッパで演奏予定の曲すべてが完成していたわけではなく，合同演奏の曲目についてはほとんど未完成のままのフライトとなってしまう。

（図４）[4]

４－３．演奏旅行の概要

以下は記念誌[5]からの行程の拾い読みである。

「１日，JAL405便，アンカレッジ，コペンハーゲンを経由してパリに。パリで乗り換えOA234便にてウィーンへ。２日の午後ウィーン着。３日，終日リハーサル。４日午前中リハーサル，午後開会式とパレード，５日ブルゲンラント州ラッケンバッハに招待されコンサート。６日午前中リハーサル，午後コンテスト，７日午前デブリングでコンサート，午後宮廷アゴラにてコンサート。

８日午前ドュルンシュタインの町並み，メルク修道院を見学，午後キンダーエアホルングスハイムにてコンサート，９日ムジークフェラインにて受賞式・コンサート，特別賞受賞。16:00からパレードで市庁舎前広場に行き，そこで合同演奏と閉会式。

10日移動してOS401便でフランクフルトへ。フランクフルトからバスでオランダ・ケルクラーデへ向かう。夕刻ケルクラーデ着。ホスト･ファミリーと対面式を済ませ分宿。11日終日リハーサル。12日午前中リハーサルとコンテスト。

昼には市庁舎前広場にてコンサート。午後ファミリーと自由時間。夜，我々の練習場に集合。コンテスト第３位の報が届いていた。我々にとってはウィーンに次いで二度目の受賞となった。」

以上がヨーロッパ演奏旅行 の概略である。期間中，多くの出会いや別れがあり，また様々な出来事があった。これらのすべての体験が，今後の子どもたちの生活に結びついていくだろうことを感じたものであった。

多くの人々の厚意の結晶によって今回の欧州演奏旅行の実現を可能にしたことを，参加者は忘れてはなるまい。同時に，この演奏旅行によって，参加した子どもたちが，人の温かさに触れ，そうして人の温かさを知ることができたこと，また音楽の素晴らしさや厳しさ，楽しさ，あるいはヨーロッパの文化を，伝統を，直接肌で感じ取ってくれたことを心からうれしく思う。

４－４．演奏旅行・・・3つのエピソード

ここで，今回の演奏旅行にまつわる２，３の出来事について述べておきたい。

ａ．エピソード1

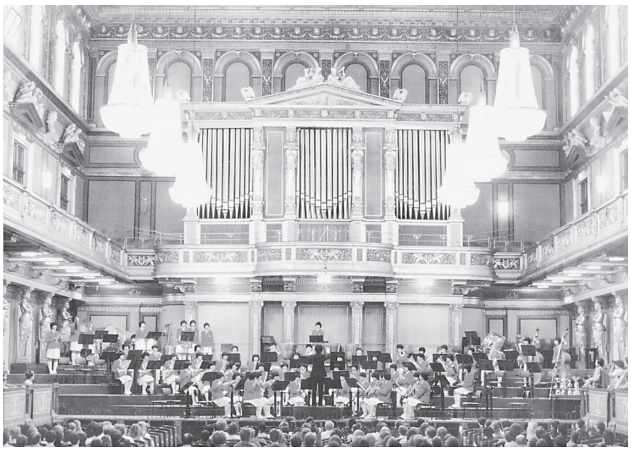
ウィーンの宿舎に大会本部から届いた電報には，特別賞受賞の報とともに，翌日の楽友会協会（ムジークフェライン）における表彰式・受賞者コンサートの招待が書かれてあった。

子どもたち全員をホールに集め，「これから電報を読み上げるよ」と前置きしてから，全員の前で電報をそのまま読み，二度目には翻訳して聞かせた。日本語で読み聞かせたにも関わらず，子どもたちはポカーンとしたままである。子どもたちの時間が止まった一瞬。そうして再度日本語で読み聞かせ，「みんな，おめでとう!!特別賞だよ！」と筆者。

しばらくの沈黙の後，徐にすすり泣きが聞こえ始めた。うれし泣きである。そしてそれがだんだん広がり，やがて大きくなっていった。引率した大人も思わず涙である。丁度ランチ時だったので「涙ふいてお昼御飯食べに行こう」，と子どもたちを促してレストランに移動した。

それでもまだ，クスンクスンしている子どもが大勢いた。子どもたちのその様子に，ウェイトレスの何人かが「どうしたの？」と心配して聞いた。しかし，これがいけなかった。聞いたウェイトレスたちがもらい泣きしてしまったのだ。レストランはまたまた，子どもたちと，新たに参加したウェイトレスたちの，鳴き声の大合唱になってしまったのである。

（図５）



（ウィーン青少年音楽祭受賞者コンサート）

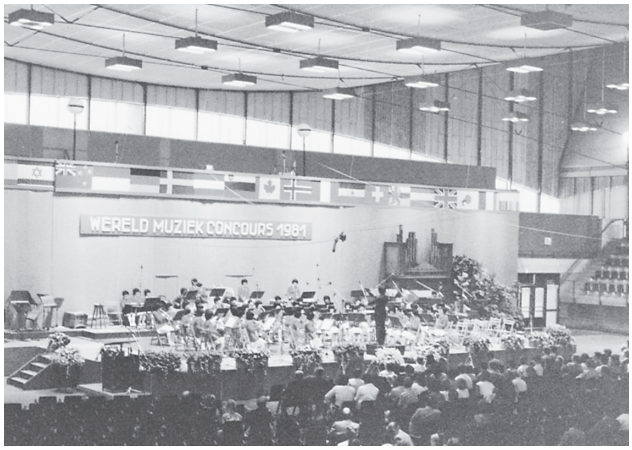
b．エピソード2

ウィーンの音楽祭では，ヨハネスガッセにあるウィーン音楽大学の学生寮を宿舎にしていた。その後の移動の際，フランクフルトからバスで，ケルンを経由して入国したオランダ・ケルクラーデではホームスティであった。ホームスティでは各家庭に入るため子どもたちはバラバラになったが，その家族とのふれあいがあった。

たった３泊４日の短いふれあいであったが，別れ際には別れを惜しんで泣いている人が多かった。子どもだけでなく，ファミリーの父母も含めて。ケルクラーデを発つ早朝，アムステルダムに向かって発車するバスの後を，泣きながら，どこまでも追いかけてくるファミリーもいた。

国や言語が違っても，人の感情や心にそう違いはなく皆同じだということを，子どもたちはきっと実感したに違いない。

（図６）



（ケルクラーデ世界音楽コンテスト／ロダ・ホール於）

c．エピソード3

話は前後するが，ウィーンでのこと。楽器を大切にすることについては子どもたちに厳しく指導してきたことの一つである。さて市庁舎前広場のコンサートが終わって楽器を車に運んでいる時，チューバの子ども（３年生の男子）が思わず手を滑らせて，楽器を下に落としてしまった。

筆者は普段厳しく言い聞かせているが，いざその場で失敗しても，注意していてそうなったのならば，それは仕方のないこと，別に怒ったりはしない。ところがその子はその瞬間，声をあげて泣き出してしまったのだ。で，なかなか泣きやまない。近くにいた保護者や教師が皆でなだめ，しばらくしてようやく泣きやんだ。

後に本人曰く，「いつも自分で注意をはらっていたのに，あれだけ気を付けていたのに，楽器を落として傷つけてしまった。それが自分自身悔しいんです。」・・・その子は自分で自分が許せなかったのだ。そんな子どもの気持ちを大切にしたいと，強く感じたものである。

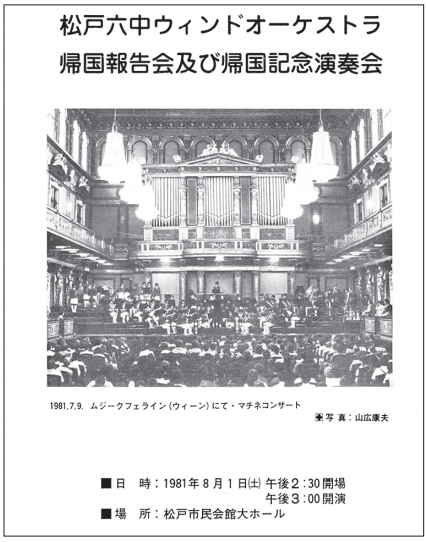
今回の渡欧は参加した子どもたちに多大な影響を与え，多くの意味で成長させたが，影響を受けたのは子どもたちばかりではない。子どもたちをはじめ今回の事業に関わった多くの人々から，筆者も多くを学ぶことができたと思っている。

５．演奏旅行のその後

５－１．演奏旅行を終えて

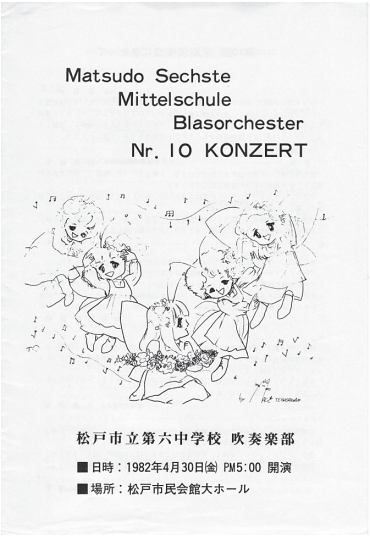
次頁（図７）は松戸市民会館における「帰国報告会・帰国記念コンサート」のプログラムである。８月１日の開催であるから，帰国して２週間ほど後の大きなコンサートであった。このように帰国後のスケジュールがまた過密になっていた。帰国の翌日には松戸市のイベントで，炎天下の江戸川での演奏。子どもたちはまだ時差ボケと体力消耗でふらふらの状態であったが，よくがんばったと思う。

（図７）



（図８）

（図９）



近隣小学校からは訪問演奏会（音楽鑑賞会），あるいは地域のまつりのパレードやコンサートの要請など多く寄せられた。例えば記念講演会に特別ゲストとしての招待演奏や，あるいはアイスアリーナでの，殿下をお迎えしての招待演奏（その時はアイス・リンクの中央に真紅の絨毯を敷き詰めての演奏であった）などが思い出される。

これらをまた一つ一つこなしていく。もっとも，この内の「松戸祭り」や「松戸マラソン」のパレードやステージ演奏については，以前から続けていたものではあったが。厳しいスケジュールの中，子どもたちはしかし，よくこれらのスケジュールについてきた。

それは年が明けても続いたが，そんな中で1982年１月９日には，松戸市民劇場にて「第１回松戸六中室内楽演奏会」（弦楽部との共同）を開いている。これは子どもたちの強い要望があって実現した。室内楽演奏会の件について子どもたちから相談を受けた当初，筆者は子どもたちの健康を理由に，一度中止か延期を提案している。この頃，子どもたちの疲労の蓄積は相当なものではなかっただろうか。

また，その数ヶ月後の４月30日には，松戸市民会館にて「第10回定期演奏会」を開いた。

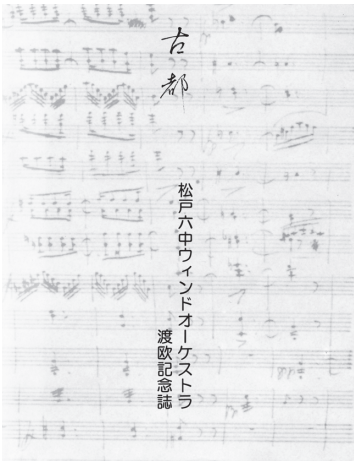
子どもたちのこのエネルギー，このバイタリティー。筆者は称賛せずにはいられない。筆者はこんな子どもたちから，いつも教わり，活力をもらっていたのである。そうして活発な活動に明け暮れながら，1981年度は終わり，やがて新しい年度を迎えることになる。今回の演奏旅行に参加した３年生は卒業し，そして新たなメンバーを加えて新年度の幕を開けたのだった。

卒業生たちは精いっぱい頑張った満足感と，やり遂げた自信に溢れていただろう。それがまた，新しい生活＝高校生活等へのパワーとなるのだと思った。同時に，欧州演奏旅行で得た様々なものを，不参加を余儀なくされた当時の高校１年生や新入部員たちなどへ，これからの筆者の授業実践，音楽活動の中で，どのように子どもたちに還元していくかということを考えていた。

書き忘れてはならないが，渡欧実行委員会編集による「古都　松戸六中ウィンド・オーケストラ渡欧記念誌」が，年度末1982年３月に発行されている。演奏旅行の日程から15日間の一部始終，例えば子どもたちの多くの写真，賞状やトロフィー，子どもたち１人ひとりや，同行の保護者，また引率した教員の報告など，様々なことが手に取るように記録されている。子どもたちの手記の冒頭には当時３年生だった部長Ｍ君の文がある。一部を紹介してこの項を終わる。

「とうとうこの日がやってきました。苦しい練習の日々でした。自分ではそう思います。ですから又喜びも大変大きいものでしょう。それはぼくだけではないと思います。また誰もがその気持ちを持っていればいいと思います。

（図10）



（図11）

（千葉ユース・ウィンド・オーケストラ
／オランダ・ケルクラーデ市庁舎前広場にて）

（中略）その今の気持ちとはこのウィーンの音楽祭へ世界の１ヵ国の代表として出場させてくださった（中略）また松戸市長様をはじめたくさんの方々や，松戸六中の諸先生方の恩，そして六中生徒の皆さんの御声援，しかしなんといっても今迄ぼく達をたくましく育て上げてくれ，好きな音楽をやらせてくれ，今回の演奏旅行も温かく「行ってらっしゃい」と送ってくれた両親には絶対に感謝すべきだと思います。（中略）１日目出発日はとにかく興奮でいっぱいです。これが１日目のぼくの感想です。おやすみなさい。」

５－２．新しい一歩

後を引き継いだ後輩たちが新入部員を迎え，また新しい一歩を踏み出していく。この年，県吹奏楽コンクール特別２部（中編成）で金賞・県代表となり関東大会出場。10月には第11回定期演奏会を開いている。

その後は定期演奏会に加え，「秋の演奏会」「ニューイヤー・コンサート」などの独自コンサートを開催し，地域に根差したスクール・バンドの活動が定着していった。1986年12月には部の「創設25周年記念演奏会」を開いた。この時すでに部員数は139名を数えた。

既述したが1985年には六中，市川八中のOBがコアになり，千葉県下から団員を募集して「千葉ユース・ウィンド・オーケストラ」を組織し，その年欧州演奏旅行を果たした。既にその数年前には，教え子のＳ兄弟，Ｋと筆者の４人で，六中の卒業生たちがコアとなった市民吹奏楽団を立ち上げ活動していた。

また県アンサンブル・コンテスト（打楽器アンサンブル）で金賞・県代表となり関東大会出場なども果たしたが，子どもたちの実態はこうである。

最初に出場した年のメンバーは全員１年生で，結果は銀賞であった。「初めて出て銀賞だよ。すごいじゃない，よくがんばったね。」すると子どもからは，「でも先生，銀より金の方が良い。」「そうか。じゃ来年また出るか。」「次は絶対金取りたい。」結局，子どもたちの前向きな姿勢が子どもたち自身を変えるのである。

そうして次の年，本当に金賞・県代表になってしまった。子どもたちの素晴らしさの一端である。

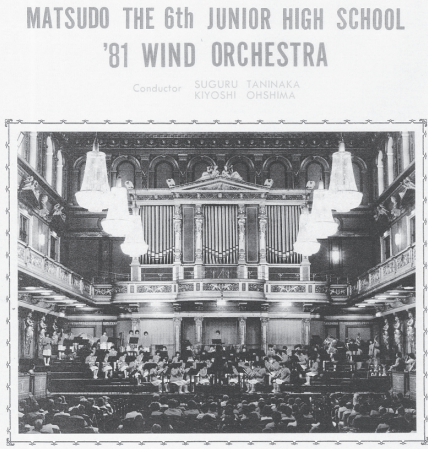
（図12）[7]

６．終わりに

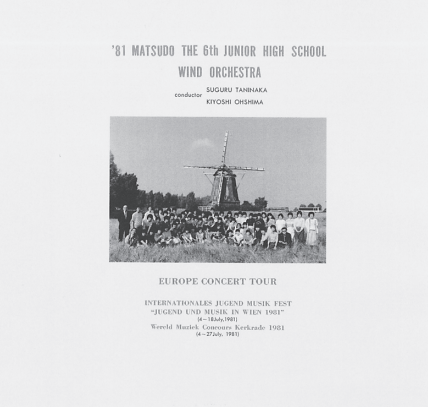
六中に赴任して６年目から希望を出していた小学校に，13年目にしてようやく異動出来た筆者は，以後複数校の小学校吹奏楽部を手掛け，文字どおり吹奏楽漬けの31年間を過ごした。その間，創設当初から指揮・指導していた松戸ブラス・オルケスターから，教え子に後を託して手を引いたが，現在立派に独り立ちした老舗の市民吹奏楽団として活動を続けている。

ヨーロッパ演奏旅行に参加したメンバーの何人かは音楽大学に進学した者，音楽家になっている者もいる。カルチャー・ショックを受けて英文科に進んだ者，外資系の企業に入った者など，ヨーロッパの文化に直接触れたインパク

（図13）[8]

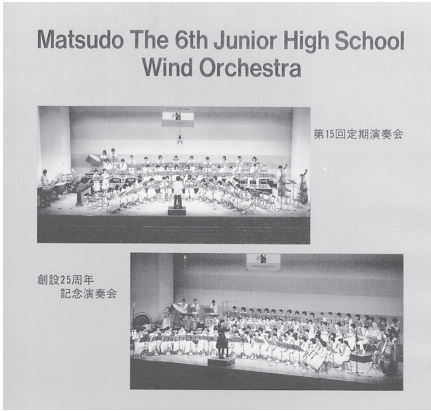


（図14）



（図15）[9]

（図16）

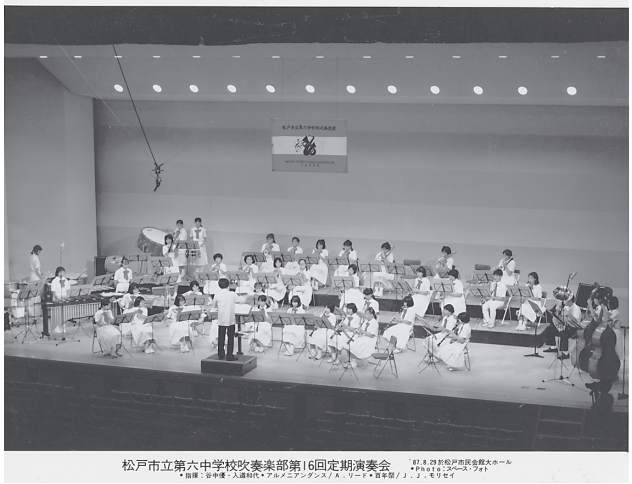


トは強烈であったようで，当時の子どもたちに大きな影響を与えた。

六中吹奏楽部出身者には，教育現場にいてやはり吹奏楽に手を染めているものが多い。また松戸ブラス・オルケスターをはじめ市民吹奏楽団や市民管弦楽団などに所属して，今も多くの卒業生たちが音楽を友としている。

渡欧派遣団団長を務めた庄司孝一学校長，松丸裕PTA会長（同副団長，渡欧実行委員会委員長），ウィーンからの招待を受理した宮間満寿雄松戸市長，渡辺宏顕本校吹奏楽部顧問も，今はすでに鬼籍の人である。ここに改めて心から御冥福をお祈りする。そうして，すべての人々に心からの感謝の意を表して本論の結びとする。

（図17）[10]



【補足】

筆者は，関わった指導者の視点から12年間の活動の足跡，子どもの変化・変容等についてここに記述してきた。本論は学術論文ではなく実践事例である。しかしながら同時に，吹奏楽活動における部活動の運営方法や指導方法，あるいは教育の指針等についても大局的かつ意識的に述べている。それ故本論は，実践に基づく教育の方法論の一つであるといえるだろう。

微力ながら，本論が吹奏楽に携わる多くの若い指導者たちに少しでも参考になれば幸いである。

（図18）[11]

KONZERTE:

Samstag, 4. 7. 1981, 16.00 Uhr
Ehrenhof, Schloß Schönbrunn

Sonntag, 5. 7. 1981, 15.00 Uhr
Lackenbach, Burgenland

Dienstag, 7. 7. 1981, 10.00 Uhr
Pensionistenheim Döbling, Wien 19

Dienstag, 7. 7. 1981, 17.00 Uhr
Agora im Burggarten (hinter der National-bibliothek

Mittwoch, 8. 7. 1981, 16.00 Uhr
Erholungsheim Lehenhof, Scheibbs-Neustift

Donnerstag, 9. 7. 1981, 16.00 Uhr
Parade vom Heldenplatz zum Rathausplatz

Donnerstag, 9. 7. 1981, 19.00 Uhr
Parade durch Grinzing

Programm:

F. v. Suppe: Leichte Kavallerie
V. Mc Coy: African Symphonie
S. Taninaka: Schladminger Fantasie
P. Koltringer: Masken
S. Taninaka: Die alte Stadt Kyoto
S. Murase: Celebration of Spring
E.L. Uray: Schladminger Fanfare
J. Strauss: Radetzky Marsch
sowie japanische Volkslieder

（図19）[12]

松戸第六中学校　吹奏楽部　第13回定期演奏会　84．8．31　於 松戸市民会館

（図20）[13]

松戸六中ウィンドオーケストラ帰国記念演奏会

（図21）[14]

砂
後

開会式パレード，誇らしげに胸をはって堂々の行進
後クロージングコンサートが終わり，ウィーン市庁舎前で最後のパレード

注

1　東京音楽大学音楽学部作曲専攻

2　この頃学校長の了解のもと委嘱シリーズを続け，同吹奏楽部の演奏，筆者の指導･指揮による初演を担った。丸山亮「断章」の他，永瀬博彦「吹奏楽のためのオスティナート」，村瀬重響「春の祝典」等。

3　1979.10月号

4　ウィーン青少年音楽祭のプログラム。

5　「古都　松戸六中ウィンドオーケストラ渡欧記念誌」編集責任者/松丸裕，発行/松戸六中ウィンドオーケストラ渡欧実行委員会　1982.3.1

6　両音楽祭の詳細は我が国の吹奏楽界への提言も含め「バンドジャーナル」,「教育音楽中学高校版」以上執筆／谷中,「教育音楽小学版」執筆／大島清，に掲載。三誌共1981年10月号グラビア。

7　県代表として関東大会に出場した当時中学２年生の打楽器六重奏メンバーと筆者。　松戸市運動公園にて

8　図13，14とも渡欧記念レコードのジャケット表裏。

9　当時毎年制作していたコンサートのレコード（ibid.図16）

10　第16回定期演奏会　松戸市民会館　1987.8.29

11　ウィーン青少年音楽祭プログラム1981.7（図14のプログラムの内側）

12　第13回定期演奏会　松戸市民会館　1984.8.31　委嘱作曲家・村瀬重響と。

13　松戸第六中学校ウィンド・オーケストラ帰国記念演奏会　松戸市民会館　1981.8.1

14　ibid. 注５　上／リング大通りを行進する六中ウィンド・オーケストラ，下／ウィーン市庁舎前にて　指揮／大島清